法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-10

「多文化相関構造研究」のための走り書き的覚書あるいは、ユダヤ人は儀式殺人をすると幻想する文化の構造

度会, 好一

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication, Hosei University Ibunka / 異文化. 論文編
(巻 / Volume)
10
(開始ページ / Start Page)
199
(終了ページ / End Page)
217
(発行年 / Year)
2009-04-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007223

Hosei University Repository

「多文化相関構造研究」のための走り書き的覚書 あるいは、ユダヤ人は儀式殺人をすると 幻想する文化の構造

度会好一
WATARAI Yoshiichi

I　文化情報学か多文化相関構造研究か

(0) この覚書は、平成二十年度科学研究費の萌芽研究部門に「多文化相関構造研究」という課題名で応募して採択されたのを受けて、研究のおおよその概念と、これまでの研究の一部の進捗具合とを走り書き的にまとめた研究ノートである。

最初に、なぜ「文化情報学」ではなく「多文化相関構造研究」という研究課題で応募するに至ったのか、そのいきさつを簡潔に記しておく必要があるだろう。

わが国際文化学部は、開設以来十年の長きにわたって「文化情報学」という新しい学問の確立をうたい文句にしてきたにも拘らず、今日に至るまで「文化情報学」は陰も形も存在せず、「文化情報学」がどのような領域を対象とするのか、その学的な領域さえ明確にされていない。それどころか、わたくしの知るかぎり、同僚の誰かが「文化情報学」の確立を研究課題に掲げて科学研究費に応募したなど聞いたこともないし、「文化情報学」と銘打った論文も「文化情報学」確立のための具体的な試論も、見かけたためしがない。

ありていに言えば、このように無責任で、不毛な状況は、わたくし

Hosei University Repository

が（密かに、ではなく）公然と予測し、かつ危惧していたことである。しかし、わたくしがまったく予想しなかったことがある。それは、そもそもの初めから「文化情報学」なるものの成立にすこぶる懐疑的で、否定的な見通しを持っていたわたくし自身が、「文化情報学」という課題名で、科学研究費に応募できないものかどうか、その可能性を検討してみたことだ。これはわたくしの天邪鬼精神のなせるわざかも知れないし、状況があまりに悲惨なために、国際文化学部の一員として何らかの責任を果たさなくてはならないと、居ても立ってもいられなくなったせいかも知れない。「自己流・文化情報学を求めて」の記から始める所以である。

(1) この探求に当たってわたくしが座標軸に選んだのは、学部の英語名称である intercultural communiaction と「文化情報」という二つのコトバである。intercultural communication における重要な要素は、言うまでもなく、発信・受信の双方向性コミュニケーションであろう。とりわけ、自分のメッセージを正確に発信することが不可欠である。意図せざるメッセージ（情報）を、うっかりあるいは無意識的に発信することは禁物である。意図せざるメッセージの発信は、誤解につながり、文化摩擦につながる。わたくしは日本語に堪能なアメリカ女性から「あなたと交接したい」と言われて、思わず吹き出してしまい、亜麻色の柳眉を逆立てさせたことがある。「交接」と「交際」の差異をご説明申し上げると、ミルクにイチゴを浮かせたように頬を染めながら納得してくださったが、このような誤用が一時的な誤解を生んだのである。一方、わたくしが「あなたと親しくなりたい」という友好のメッセージを表明するために、" I want to be intimate with you." とその女性に言ったとしたら、わたくしも同じようにまったく意図しないメッセージを発信したことになる。つまり、きわめてねんごろな性的関係を暗示してしまう。intimate というコトバの connotation（内包）に無知だったために起きたコミュニケーションの

Hosei University Repository

失敗例である。

（2）つぎは「文化情報」というコトバについて。東京のどこでシェイクスピア演劇が見られるか、大原美術館でどのような西洋絵画が見られるか、どこで安くて美味い懐石料理に出会えるか、こういう情報を掲載している雑誌類を「文化情報誌」と呼んでいる。巷で使われている「文化情報」というコトバはその程度の意味しか持っていない。同様に、intercultural communication という枠組みの中で、「文化情報」というコトバを多少とも学的に使える場合は、きわめて限られていると覚悟しなければならない。管見では、「文化情報」というコトバは、「文化情報」と「通文化情報」という対概念としてのみ、学的な概念として有効に機能することができる。ある記号・象徴・シンボルの「通文化情報」は、複数の文化に共通した情報を指し、「文化情報」はある文化に制約された情報のことであるとしよう。日本語の「菊」と、英語の chrysanthemum と、イタリア語の crisantemo の「通文化情報」は、「キク科キク属の多年草」という意味・概念である。しかし、この記号が象徴する意味・概念とそれが指示する「キク」の「文化情報」は、それぞれ異なる。西欧では、豊饒や王権の崇高さや日本などを含意することがあるが、一般アメリカ人にとっては、「キク」は誕生日祝いにふさわしい花であるのに、一般イタリア人の「キク」は死者の鎮魂のための花である。イタリアでこれを誕生日祝いのつもりで差し出せば、意図せざるメッセージを発信したことになり、気まずい関係になるのは必定である。

(3) このような「文化情報」の差異を見分けた、意識的な発信行為によって、誤解や文化摩擦を避けながら、円滑な異文化間コミュニケーションが行えるのである。文化研究や文学研究もこの「文化情報」の知識なしには、いびつなものにならざるを得ない。したがって、このような「文化情報」の研究を主領域とする「文化情報学」がありうるであろう。またわたくしの規定では、「文化情報」は「通文化情報」

Hosei University Repository

の対概念としてありえないわけだから、「文化情報学」は必然的に「国際文化情報学」になるはずである。

問題はこれが新しい学問分野だと言えるかどうかである。残念ながら、わたくしの眼には新しく映らなかった。周知のように、それはすでに既存の意味論の一領域だからであり、また仮に新たな学的領域として独立させても、その領域は広い視野を必要とする割には単調なために、意欲的な文化研究者を満足させるだけの魅力と可能性とに欠けている、と見えたからである。

(4) もちろん、文化摩擦という文化摩擦が、意図せざる「文化情報」をうっかり発信した結果生じるわけではない。靖国問題に関する元首相の某氏の発言と参拝が内外に生み出した文化摩擦を見ればわかるように、それは明治政府が創出した「靖国神社」に関する個人的かつ偏向した靖国観を、意図的なメッセージとして傍若無人に発信したために生じたものである。「靖国は戦没者追悼のための施設である」という言い草が、それだ。視野狭窄的なナショナリズムの眼ではなく、広い視野と知識から靖国神社の成立を考察すれば、それが平安時代の御霊信仰を基礎にしながら、ヨーロッパ型近代を目指した明治政府によって政治的に捻じ曲げられ、「天皇のために全身全霊をささげた天皇の軍隊の兵士を顕彰して神として祀る宗教施設」に変えられていったことが明らかになる。御霊信仰は、天皇の逆賊として罰せられ、怨みをのんで死んだ者の怨念の霊力（これこそ人が神・鬼になるエネルギー源）に恐れをいだいたことに発するが、靖国思想は天皇にすべてを捧げつくすことを兵士に要求したから、靖国神社に合祀されている「神・鬼」は、霊力を使い果たして、「神・鬼」としての霊力をば持たない「護国の鬼」「英霊」たちなのである。彼らに神霊としての霊力を持たせたかったら、戦争に駆り立てられ、家族と引き裂かれた彼らの天皇への怨念こそが必要なのだ。靖国神社とは、そういう捻じ曲がった性質の政治的神社、政治・宗教施設である。

Hosei University Repository

(5) さて科学研究費に戻ると、萌芽研究は来年度から「挑戦的萌芽研究」と名を変えるように、独創的な発想か否か、新しい学的領域への発展の可能性があるかどうか、このことが審査される。わたくしは自分の考えた「文化情報学」が、新しくもなければ、独創的でもなさそうなので、応募することをあきらめたのだが、本学部がこのまま他人事のようにやり過ごすことは許されない。標榜する「文化情報学」の創出に向けて、複数の研究者による共同研究を組織し、「挑戦的萌芽研究」や「新学術領域研究」部門に挑戦するぐらいのことは、高等研究機関として果たすべき最低限の社会的責任である。すでに十年の歳月を空費しているのだ、この程度のことさえやらぬ、出来ぬ、というのであれば、即刻「文化情報学」の看板を下すべきであろう。現在の無責任で不毛な宙吊り状態を続けるのは、学部にとってもスタッフ総体にとっても百害あって一利なし、である (II (20) を参照)。学部スタッフ諸賢の意見を伺いたい、いや、「文化情報学」の扱いに関して学部全体の討論をおこなうよう、改めて提案したい。

(6) 冒頭に書いたように、わたくしは「文化情報学」ではなく「多文化相関構造研究」を掲げて応募した。「多文化相関構造研究」は、いかなる文化といえども、純粋に自己発達してきたことはないと考えることを以て出発点とする。この基本に立って、ドイツ人だけがゲルマン民族の Urvolk であると明言し、ドイツ・ナショナリズムの火付け役となったヨーハン・フィヒテのような[1]、ナショナリズムの文化論を徹底的に退け、共生の時代にふさわしい文化研究を創出することにある。第二に、従来は国境を越えた異文化間の交流として見られていた文化現象を、多くの国境にまたがる広領域に於ける動的な構造として捉えようとする。それは、広領域内のさまざまな文化が接触してせめぎあう相関関係の生み出す構造になるから、空間軸だけでなく時間軸においても構造化しなければならない、動きと崩壊とを孕んだ動的な軟構造である。よってこの研究の領域は、社会史、思想史、比較

Hosei University Repository

宗教史、文化人類学、社会心理学、多文化間心理学、精神病理学などにわたる学際性を帯びることになる。

例えば――。海の幸、山の幸に恵まれた伊勢の国は高倉山の麓に本拠を構えていた古代人度會氏は、伊勢内宮のアマテラス大神の祭祀や、外宮のトヨウケ大神の祭祀に密接に関っていた神官の一統であるが、この地を支配する海人族でもあった（ワタラヒは古代朝鮮語の海を意味するパタルに通じ、トヨウケは海の神でもある）。彼らが外宮神官として早春に行なった御田始という神事について一言すると、この祭式が済むまでは、農民たちは田植に着手しなかったものだ。植えても苗が育たないからである。アマテラスも皇祖神になる以前は稲作と深い関係のある農耕神であったと考えられている。つまり、日本古来とされる神道も東アジアの稲作地帯との関係において構造化されなければならない。その意味で、「神風の伊勢の国は常世の浪の重浪のよする国なり。傍国のうまし国なり」（日本書紀）と伝承される、アマテラスの「トコヨ」という言葉には、中国道教の神仙思想の影響があるというアプローチ[2]は、われわれの基本的なアプローチである。また例えば、他文化との差異を誇るユダヤ教やヘブライズムとて純粋に自己発達してきたのではなく、周辺文化と切っても切れない関係にある。ヘブライ語聖書創世記に出てくる「蛇」は、楽園で一番賢い動物であるに過ぎないが（三章一節）、ユダヤ教ナザレ派（イエス派）の文献であるヨハネの黙示録（九〇年頃成立）になると、「悪魔でありサタンである龍、すなわち年を経たあの蛇を、天使は捕らえて千年のあいだつないでおいた…」（二〇章二節）とあるように、「悪魔」に変貌している。このユダヤ教の構造的な変化に関ったのがイランの思想である…。

以下、「ユダヤ人の儀式殺人」を例にとりながら、多文化相関構造研究は何をどのように見えるようにするのか、その一例を簡単に示してみよう。

Hosei University Repository

Ⅱ　ユダヤ人は儀式殺人をすると幻想する文化の構造

(1) 十二世紀以後、広範囲に広まってゆく儀式殺人幻想を扱う前に、ヘレニズム世界を視野に収めなければならない。すでに前二世紀に、ストア派のポシドニウス（前一三五？－五一）が、ユダヤ人の儀式食人について語っているのだ。前一六八年に、セレウコス朝シリアのアンティオコス四世がエルサレム神殿に侵入しとき、そこで目の当りにしたのは、意外にも囚われの身のギリシャ人の姿で、このギリシャ人はさらに驚くべきことを口にした。ユダヤ人は七年ごとにギリシャ人を捕らえては、これを太らせてその肉を食らい、ギリシャ人憎悪を誓うのだ、と[3]。

イエスとほぼ同時代に生きたユダヤ人の歴史家に、『ユダヤ古代誌』『ユダヤ戦記』などの史書で知られるヨセフスがいるが、彼の論敵だったエジプト出身のアレクサンドリア市民アピオンも、同じような儀式食人を語っている。アンティオコス四世がヤーウェ神殿に入ってみると、ご馳走を前に浮かぬ顔のギリシャ人がいた。男が語るには、ユダヤ人は毎年ギリシャ人を捕らえて一年のあいだ太らせてから、これを犠牲に捧げ、骨と皮と血を残して内臓まで食いつくすのだ、と[4]。七年に一度だったユダヤ人の食人行為が、毎年の行事に変化しているのが注意を引くが、中世ヨーロッパと違って、「血を食べない」と明言されていることも注目に値する。血抜きをした肉しか口にしないユダヤ教の戒律を知っていただけでなく、その事実までは歪曲しなかったのだ。

エルサレムのヤーウェ神殿の至聖所に侵入したアンティオコス四世が登場することにも看取できるように、この神話の発端は、アンティオコスのユダヤ教弾圧が引き起こした反ギリシャ感情対策として、セレウコス朝シリアがばら撒いた逆宣伝であると考えるべきであろう。

Hosei University Repository

人間を犠牲に捧げたヘブライ語聖書の記述を、セレウコス朝ギリシャ人が巧みに利用したことは、想像に難くないが[5]、これを理由にユダヤ人が告発されたことなどなかったという事実も押さえておく必要がある。

さて、ここで検討しなければならないのは、このヘレニズム世界で語られていたユダヤ人の儀式殺人が、中世ヨーロッパに流布した儀式殺人幻想の構造的基底をなしている幻想と言えるかどうか、である。論証の過程を省略して結論だけを言うなら、現在までの筆者の研究では、二つの儀式殺人幻想は構造的に不連続である。

(2) ユダヤ人はキリスト教徒を殺しその血を採って、過越祭に食べるマッツァに混ぜるか、医学目的に使うという、キリスト教世界に広まった幻想は、一一四四年、イングランドのノリッジから始まったという通説がある。しかし、ノリッジのウィリアム少年の惨殺場面をまことしやかに語った最初の人物であるベネディクト会修道士、モンマスのトマスの記述によれば、ユダヤ人はトマス少年を十字架にかけ、その肉体から吹き出る血を止めるために、熱湯を注いだだけである[6]。すなわち、イングランドに姿をあらわした時の儀式殺人幻想の特徴は、イエス磔刑を模した十字架刑にあって、「血を採取する」ことや「血を食べる」ことにはない。これがこの幻想の基本構造である。

一一五〇年代までには充分に発達したこの幻想は、イースター（復活祭）か過越祭の日に、イエスを冒瀆するために、あるいは離散ユダヤ人の解放とパレスチナ復帰に必要な犠牲として捧げるために、キリスト教徒の少年を十字架にかけてなぶり殺すというものである。最初はキリスト教の祭日である復活祭に行なわれるとされたが、次第にもっともらしいユダヤ教の過越祭に変えられていったらしい。

(3) この「十字架」の要素を重視するなら、一つだけ気になる事件がローマ支配下のシリアで起きている。五世紀の歴史家ソクラテスが記録している事件である。四一五（六）年、シリアのインメスタルで、

Hosei University Repository

ユダヤ人絶滅を図ったという「ハマンの陰謀」を逃れたHの記念としてユダヤ人がおこなうプリムの祭の日に、ハマンの人形を十字架につけて、これにありとあらゆる呪詛を浴びせて燃やすという乱痴気騒ぎをやるのだが、ユダヤ人はキリスト教徒の少年を十字架につけてなぶりころしたという[7]。しかし、この記録と、以下に記すモンマスのトマスの記録との相関関係は、現在のところ不明である（トマスがギリシャ語原典を読みえたとは思えないが、ラテン語訳は読んでいたかもしれない）。

(4) ノリッジ近郊の森のなかで、猿轡をはめられたウィリアム少年の惨殺死体が発見された一一四四年当時、ノリッジの人々がすでにこのような幻想を持っていたと考えるのも、間違っている。どうしてそう言えるか。これに関する唯一の一次資料としては、先述のモンマスのトマスが一一四九年頃に第一巻、一一七二年頃に最終巻を刊行したラテン語伝記より他にない。したがって、このテクストを批判的に読む以外に真実に接近する方法はない。わたくしの採った批判的な方法は、モンマスのトマスの物語を継起的な時間の秩序にしたがって、再構成してみることであった。すると、つぎのようなことがわかった。一一四四年三月二十五日、森の中で猿轡をはめられた十二歳の少年の遺体発見。これを市当局が取り調べた形跡はない。二日後の三月二十七日、遺体はその場に埋葬され、三月二十八日、叔父の司祭ゴッドウィン・スタートが現場にやってきて、遺体を掘り返し、身元を確認すると、そこに埋め戻して帰宅してしまう。これらの事実は注目に値する。なぜなら、近親の聖職者を始めとして、人々が少年の死をなんら特別視せず、ましてやユダヤ人による儀式殺人などと思っていなかったことを証言しているからだ。

遺体がチャプター・ハウスに移されたのは、それから六年後の一一五〇年四月十二日。ウィリアムを聖人にしたいトマスが待ちに待った遺体の昇格である。このとき立会ったトマスは、ウィリアムの遺

Hosei University Repository

体から二本の歯を抜き取って、ちゃっかり私物化している。というわけは、死んだウィリアム少年が病人の苦しみに憐れを催して夢枕に立って、「わたしの秘書であるトマスに相談させるがよい」、「トマスが隠し持っているわたしの歯を聖水で洗って、その水を飲ませよ」と語ったとテクストにあるからである[8]。トマスが「死者の歯」を私物化したと同時に、死者の歯の神秘的な治癒力を信じる土着的、異教的な信仰の残滓の持ち主であること、彼の尽力があってこそウィリアムの遺体が昇格したらしいことなども、テクストから透けて見えることである。さらに、一一五一年七月二日、大聖堂内主祭壇の南側へと昇格し[9]、それから三年後の一一五四年四月五日を迎えて、晴れて主祭壇の北側、かつて殉教者のチャペルと呼ばれた場所に納まったのである[10]。一〇年の歳月を経てようやく殉教者（＝聖人）の座にたどり着いたというわけだ。地方的な殉教者ウィリアムの物語がノリッジという地方性を脱却して、全イングランド、いや全ヨーロッパにまで広がるのは、この時以後のことである。

(5) 一一七一年、フランスのロワール地方のブロワで、類似の十字架事件が発生し、数十人のユダヤ人が殺害された。この幻想の運搬役として、ベネディクト会修道士が関わっていたことは確かだが、このフランスと、一〇六六年以降ノルマンディー出身のノルマン貴族に支配されてきたイングランドの文化との、構造的な連続性についての更なる考察が必要である。

(6) 大陸にも姿をあらわしたこの幻想に「血」の要素が入るのは、一二三五年一二月のドイツであり、これ以後、儀式殺人幻想は新たにして不気味なる展開を見せた。ユダヤ人は儀式に使ったり、薬用に使ったりする血を採るため、キリスト教徒の子供を殺すという幻想である。このドイツ生まれの幻想は、イングランドと接点がある。ヘンリー三世と義兄弟だった神聖ローマ帝国皇帝フレデリック二世からの要請で、イギリスから二人の改宗ユダヤ人が送られて、証言をしたから

Hosei University Repository

である。

フルダ川のほとりに点在している水車小屋の一夫婦が、町の教会に出かけたクリスマスの日、留守宅から出火して、五人の息子が焼死体となって発見された。ドミニコ会のエルフルト年代記によると、二人のユダヤ人が犯人で、彼らは子供を殺害して、その血を抜いてワックスをかけた皮袋にためたという[11]。目的は ad suum remedium だというのだが、これが宗教的な魂の癒しなのか、それとも薬学的な癒しなのかは、未だに未解明のままである。ただ、このために、三四人のユダヤ人が村人たちの手にかかって虐殺されたという事実だけは厳として残る。

(7) この幻想は、キリスト教世界の深部でうごめき始めた病的な恐怖の典型的な例であり、十字架刑の幻想よりもさらに不気味な雰囲気に包まれている。「神は…キリストがその血によって贖罪の供え物となるように定めた」(ローマ人への手紙三章二五節) ——このように、キリスト教徒は十字架上のイエスが流した血の救済的な効力を信じている。そして、キリストの血と肉体としてワインとパンを摂取するという聖餐式は、言うまでもなく、象徴を使った儀式食人である。この象徴的な儀式食人を実践しているキリスト教徒が、ワインという象徴ではなく実際の血を使って儀式食人をするという犯罪をユダヤ教徒になすりつけたのだ。不気味であるのは、「血」と「血」に関する生と死の信仰とが深く絡んでいるからである。

(8) ユダヤ人は実際に人間の血を使った儀式をするやつら——このような幻想が、どのようにして一二三五年のフルダで誕生したのだろうか。それを読み解くのは容易ではないが、異端についてのおどろおどろしい話を耳にして、目くらむばかりに興奮した民衆の想像力の混乱が介在しているし、更にはキリスト教の重要な儀式である聖餐をめぐる正統と異端の論争がなんらかの陰を落としているように見える。

当時のヨーロッパは、インノケンティウス三世(一一九八-

Hosei University Repository

一二一六)、ホノリウス三世(一二一六-二七)、グレゴリウス九世(一二二七-四一)と三代つづいた十字軍鼓吹の教皇の下にあって十字軍熱に浮かされていた時代であり、また同時にさまざまな異端が発生して、異端審問という忌まわしい制度が発足した時代である。異端審問が制度化されたのは、一二三二年から三五年にかけて、グレゴリウス九世が積極的に関って実現した。ただし、イングランドに関する限り、第三回十字軍の時から十字軍熱が押し寄せたものの、異端はきわめて少なかったし、教皇直属の異端審問官制度も導入されるに至らなかった。

清貧の生活を説く富裕な商人ワルドが南フランスで起こしたというワルド派が異端の烙印を押されたのは、一一七九年。ワルド派にもましてカトリック体制を脅かしたさらに大きな異端宗派が、カタリ派(アルビジョア派)である。南フランスに一大勢力を張ったカタリ派は、つとに一一一九年に教皇シクストゥス二世から異端破門の宣告を受けていながら、びくともしなかった。現世を悪魔の創造した世界と見なすがゆえにこの世の富をさげすみ、いかなる私有物をも所有せず、絶対的な清貧生活と純潔生活を説いた選りすぐりのパルフェ(完徳者)たちは、純潔と清貧の生活を守りぬいて、人々の心をしっかと捉えたからである。現地に派遣された聖ドミニクス(一一七〇頃-一二二一)が、シトー会(一〇九八年設立)修道士のだらけきった俗的な生活態度を見て、カタリ派に太刀打ちできないことを痛感し、カタリ派の純潔と清貧の生活を取り入れたドミニコ会(一二一五)を創設したのは、カタリ派に対抗するためであった。

(9) 一二三〇年代のドイツも、同じような異端狩りが吹き荒れた時代である。それも、フルダから遠くないチューリンゲン地方が舞台であった(フルダからチューリンゲンの中心地エルフェルトまで、直線距離にしておよそ百キロしか離れていない)。異端狩りの主役を演じたのは、狂信的な異端審問官として悪名高いマールブルクのコンラー

Hosei University Repository

ト（？－一二三三）である。多くの封建領主・貴族を異端者として攻撃しただけでなく、異端各派に対しておぞましい儀式をすると告発して憎しみを買ったその果てに、何者かが放った刺客の手にかかってあえない最期をとげた男だ。この異端審問官が人々の心にどのような妄想を持ち込んだかは、彼を信頼していたグレゴリウス九世の有名な一二三三年勅書 *Vox in Rama* を読めば、一目瞭然である。この教皇勅書は、ヒキガエルや猫の姿をしたルチフェル、サタンら悪魔の頭目の尻に悪魔崇拝の接吻をしたり、互いに同性愛的、近親相姦的な乱交にふけったりするという妄想的な異端者像をヨーロッパ世界にばらまいて、それを「事実」に変えてしまった元凶である。コーンの指摘するように、教皇はコンラートの妄想に感染していたと見て間違いあるまい[12]。

(10) この地にはびこった異端派に、ワルド派のほかにカタリ派がいたことを重視しなければならない。カタリ派にとって、聖体は悪魔が支配するこの物質世界の一物質でしかなく、それをキリストの身体として恭しく体内に摂取する聖餐式は、およそ笑うべき儀式でしかなかった。聖体はパンのかたちをした物質でしかなく、「そこにキリストの身体は存在しない」――これが聖餐に対するカタリ派の明晰な基本的態度であった[13]。カタリ派は、イエスを神から生まれた神であるとする「受肉」の教義も認めなかったし、性的関係を汚らわしいと見なして結婚の秘蹟も認めなかった。

(11) この「聖体にキリストの身体は存在しない」と明言するカタリ派と戦うために、カトリック教会は聖餐の理論を明確にする必要があった。そこでキリスト教史に登場したのが、「キリストの身体はパンの中に存在する」という全質変化の教義である。初登場は一二一五年、インノケンティウス三世が召集した第四回ラテラノ公会議の場であった。会議の第三日目、教皇自らが提案して承認された信仰箇条に見える短い文章が、それである。「キリストの身体と血は、パンとワ

Hosei University Repository

インの形をした聖体の中に、真実、含まれている。パンとワインは、神の力によって、本質においてキリストの身体と血に変えられたのである」[14]。

パンはまったく性質を変えて、キリストの身体そのものとして現前しているというこの教義は、当然のことながら、「心で食べる者は、歯でかむことはない」というアウグスティヌス以来の象徴説を排除することになるので、高位聖職者のあいだでも問題のある理論であり、反対するベレンガーを異端者として処分したあげくの強行であった。何しろ、中世における哲学・物理学の権威アリストテレスにしたがえば、ある物体は他の物体に取って代わることがなければ、他の物体内に入ることなどあり得ないのである[15]。どうしてパンのなかにイエスの身体が入り込むことなど出来ようか。ユダヤ人の理論家もこの点を問題にして、理性的であるべき科学の原則に反すると批判していた[16]。

(12) しかし、聖餐の神秘的な効能を信じてきた民衆や民衆と接している司祭たちが、パンとワインのなかに、キリストの身体と血が実質として存在すると信じたとしても、なんら不思議ではあるまい。そう信じた彼らの頭に、次に、異端についてのおどろおどろしい幻想が入ってきたのである。しかも、彼らの頭は、異端者と異教徒ユダヤ人の区別などつかなかった。いや、教皇を頂点とする教会人でさえこのハードルを越えられず、ラビ的ユダヤ教のタルムードを異端書として焼き払っていた時代である（度会好一『カエサルの友、神の敵』近刊、第2章)。不信心なユダヤ人は、キリスト教徒と違って「キリストの血」を拝領しない、だが、「キリストの血」であるワインを拝領して神秘的な効能を持った「キリスト教徒の血」だけはやたらに欲しがる、こういう幻想が生まれたのは、必然の成り行きであったろう。

(13) 注目すべきは、教皇を頂点とする教会人と民衆とのあいだに横たわる断絶である。教皇たちはユダヤ人が「血」の儀式食人

Hosei University Repository

をするという巷説を否定した。インノケンティウス四世は、勅書 *Lacrimabilem Judaicarum* の他に、次のような書簡を出した――「この季節にユダヤ人が、殺した子供の心臓を共食するという虚偽の告発をする人々がいる。彼らはユダヤ人の律法がそれを命じていると信じているが、真実はまったく逆である」(一二四七・三・二八)。「いかなる者も、ユダヤ人が宗教儀式において人間の血を使用していると告発してはならない。ユダヤ人は旧約聖書によって、人間の血はもとよりいかなる種類の血も使用しないよう命令されている。しかし、フルダや他のいくつかの場所で、多くのユダヤ人がこのような嫌疑で殺されているので、この書簡の権威により、将来このような事件を二度と起こすことを厳重に禁じるものである」(一二四七・六・九)。

(14) ユダヤ人による十字架刑の儀式殺人という幻想については黙認したらしい教皇たち((16) を参照せよ) が、血の幻想を否定したことは、まことに興味津々である。彼らが「キリスト教徒の血を欲しがる」ユダヤ人の存在を否定したのは、旧約聖書に通じている博識のせいばかりではあるまい。むしろ、カトリック信仰の重要な儀式である聖餐の効能を信じ、かつ聖餐を擁護したかったからであろう。全質変化 (化体) 説の名づけ親だったインノケンティス三世が、一二〇五年、センスとパリの大司教に宛てた書簡にある次の言葉に、そのヒントが秘められている。「ユダヤ人の子供の乳母をしているキリスト教徒の女性が、主のよみがえりの日にキリストの身体と血を摂取すると、ユダヤ人は三日の間この乳母たちに母乳を便所に流させてから、ふたたび授乳させる」[17]。

この教皇によれば、聖体を摂取して変質したキリスト教徒の「血」を、ユダヤ人はこれほどまでに嫌っているのだ。彼らがキリスト教徒の血をほしがっては、論理的矛盾になる。しかし、聖餐を信じないユダヤ人が聖餐の効能を信じることもまたありえないことだから、この教皇はユダヤ人に仮託して聖餐の神秘的な効能を吹聴したにすぎまい。つ

Hosei University Repository

まり、キリスト教徒の血を嫌うこのユダヤ人像は、カトリック正統が自己確定、自己確立するために必要としたユダヤ人像だったのだ。

(15) これに関連して注目すべきは、ユダヤ人が聖体を冒瀆するという告発、あるいは幻想である。この幻想が歴史に登場するのは、全質変化説の登場以後に属する。聖体パンが釘やナイフで切り刻まれて血を噴きだすというこの幻想は、全質変化説の正しさを立証する、またとない証拠となるからだろう。全質変化説を強化したい教会人が積極的に広めた告発だと考えられる。当然のことながら、教皇インノケンティウスは非難の声明を出していない。

(16)「血」と「十字架」の要素が混合していた儀式殺人幻想が確認できるのは、一二四七年三月のフランスのヴィエンヌ地方である。ユダヤ人が二歳の少女を殺害して血を採り、周辺ユダヤ人社会に分配してから、死体を十字架にはりつけたとされた事件がおきたのである。このとき、教皇インノケンティウス四世はヴィエンヌ司教への書簡(一二四七・五・二八日付)で、「ある少女を十字架につけたと告発されたユダヤ人」を問題にしているが、裁判手続の欠如・自白の欠如・拷問の使用を難詰しただけである[18]。「血」の儀式殺人を明確に否定した他の書簡と対照的である。また、一二五五年、イギリスのヘンリー三世が一九人のユダヤ人を「十字架」の儀式殺人のかどで処刑したとき、教皇からは何のお咎めもなかったと思われる。叱責があったならば、信仰心の厚かったこの国王が、あっさり処刑を断行したはずもないからである。

(17) 中世からルネサンス時代、近代初期にかけては割愛して、ヨーロッパが進歩の理念を掲げ、リベラリズムを謳歌していた十九世紀に飛ぶことにしよう。欧米列強に侵食されて弱体化したオスマン帝国のダマスクスで、カトリック神父トマーソと従者のイブラヒム・アマラが行方不明となり、ユダヤ人が殺人容疑で逮捕されるという事件がおきた。一八四〇年に起きたこの事件は、一九世紀になっても生き残

Hosei University Repository

っていたヨーロッパの儀式殺人幻想の構造的な一部である。一八一〇年アレッポ、一八二四年ベイルート、一八二六年アンティオケア、一八二九年ハマ、一八三四年トリポリ、一八三八年エルサレムというように[19]、オスマン帝国内のキリスト教徒社会は、ある日忽然と姿を消してしまうキリスト教徒が出ると、これをキリスト教徒の血欲しさからユダヤ人が行なう誘拐であり、儀式殺人であるとしてきたが、オスマン帝国当局はこの幻想を抑止し、有罪者を出したことはなかった。ところが、一八三九年十一月にパリから着任したばかりのフランスの外交官、法学士ラティ・メントンは、一七四〇年の協定のカトリック僧侶保護の条項にしたがって介入し、拷問を使って詳細な調書を取った。オスマン帝国の弱体化と列強の強大化を象徴するかのように、列強の領事は独自の法廷、独自の監獄、独自の警察さえ持っていたのだ。このために、ラビ長を始め一九名のユダヤ人が逮捕され、二人が殺された。

(18) 以下は一八四〇年三月二日の尋問記録の一部である。

Q　しかし、血は何のために使うのか。お前たちの祝日用に、聖別されたパンに入れるためか。皆でそれを食べるのか。

A　聖別されたパンに使われる血は、全員に分配されるのではありません。ハハムや賢者たちだけに与えられるのです…。他のハハムたちがアンテビ［当地のラビ長］に粉を送り、彼が手作りでパンを作ります。誰にも見られずに、彼は粉に血を混ぜます。

Q　血は他の地域にも送られるのか。それとも、ダマスクスのユダヤ人だけにとって置かれるのか。

A ハハム・ヤコブは、バクダードにも送ったと、わたしに言ったことがあります。

Q 陰謀は特にキリスト教の僧侶の捕獲をねらったのか、それともキリスト教徒なら誰でも良かったのか。

A 狙いはキリスト教徒の捕獲にありました。しかし、トマーソ神

Hosei University Repository

父が網にかかりました、それで殺されたのです。

(19) このような詳細な尋問記録は、さまざまな言語に翻訳されてユダヤ人の儀式殺人の動かぬ証拠として播種されてゆくが、中でも特筆すべきは、フランス語版を翻訳したアラビア語版が一八九九年、一九六八年、一九八六年に、それぞれカイロ、ベイルート、ダマスクスで出版されたことだ。特に一九六八年版の編者は、一八九九年版の記録を発見するまでは、ユダヤ人が行なうという儀式殺人など、たわいのない迷信だと思っていた[20]、と書いているのが印象的である。この時、「幻想」「迷信」は「歴史的事実」に変えられたといってよいだろう。そして言うまでもなく、この一九六八年は、イスラエルがヨルダン川西岸を占領した翌年であり、イスラエルへの怨念が深く、広く、パレスチナ人の意識に入り込んだ年である。こうしてこの幻想は、イスラエル占領下のパレスチナのイスラーム教徒アラブ人の想像力にも接木されたといえるが、これが強固な構造になっているかどうかは、更なる検証が必要である。確実に言えることは、イスラエルの占領が長引けば長引くほど、アラブ人の心理・意識に深く入り込んでゆき、構造の強化につながるということだ。

(20) 以上の記述に関連した拙著に、『ユダヤ人とイギリス帝国』(岩波書店2007)、『カエサルの友、神の敵——ヨーロッパの内なるユダヤ人』(近刊) などがある。「多文化相関構造研究」と銘打ってはいないが、その探求の過程で生まれた産物であり、国際学の名にふさわしい文化研究になりえているという社会的な評価を得られるなら、これにすぎる喜びはない。しかし、大学評価機構の評価ということになれば、本学部が「文化情報学」の確立を標榜する限り、これらの研究は「文化情報学」確立のための努力とも研究業績とも評価されない。この事態を深刻に受け止める同僚が果たして何人いるだろうか。

Hosei University Repository

[注]

1 J. Fichte, *Reden an die deutsche Nation*, n.d. p.105.
2 千田稔『伊勢神宮―東アジアのアマテラス』2005, pp.55-89.
3 F. Jacoby, ed. *Fragmente der Griechischen Historiker*, 1923ff. 87.
4 Joesphus, *Contra Apionem*, 2: 91-96.
5 R. De Vaux, *Studies in Old Testamnet Sacrifices*, 1964, pp. 52-90.
6 A. Jessop and M. R. James eds. *The Life and Miracles of St William of Norwich by Thomas of Monmouth*, 1896, p. 22.
7 E. Horowitz, *Reckless Rites: Purim and the Legacy of Jewish Violence*, 2008, p. 215.
8 Jessop and James, *Life and Miracles*, pp. 175-76.
9 Ibid., pp. 185-86.
10 Ibid., p. 221.
11 *Monumenta Germaniae Historica Scriptores*, 1828-1934, XVI, 31.
12 N. Cohn, *Europe's Inner Demons*, 1975, p. 34.
13 渡邊昌美『異端カタリ派の研究』1989, p. 272.
14 N. Tanner, *Decrees of Ecumenical Councils*, 1990, p. 230.
15 Aristotle, *Physics*, 4:1.
16 D. Lasker, *Jewish Philosophical Polemics against Christianity in the Middle Ages*, 1977, p. 139.
17 J. Trachtenberg, *The Devil and the Jews*, 1943, p. 110.
18 S. Grayzel, *The Church and the Jews in the XIIIth Century*, 1966, pp. 264-67.
19 J. Frankel, *The Damascus Affair*, 1997, p. 54.
20 *Ibid.*, p. 418, n. 57.